

スポーツを通じたJICAの国際協力

# スポーツが未来をひらく!!



スポーツは国や民族・部族、文化が異なっても、ともに参加し、ともに楽しめるボーダーレスなもの。JICAは、スポーツを通じて途上国の個人や集団が持つ能力を高めたり、可能性を広げたりすることで、生活をより健康で豊かにするための協力を行っています。東京2020オリンピック・パラリンピックに向けて、そしてそれ以降も、持続的な取り組みを展開していきます。



2018年にセネガルで開催された「UNDOKAI」で組体操を行う児童たち。青空の下、児童たちが作った横断幕や絵が万国旗のように校庭を彩り、笑顔と歓声が満ちた一日となりました。

 セネガル  マラウイ

世界に広がる運動会

## UNDOKAI

日本でおなじみの「運動会」。途上国の子どもたちに体育の楽しさを感じてほしいというJICA青年海外協力隊員の思いと活動から、世界に「UNDOKAI」が広がっています。途上国での体育の授業では理論を学ぶ座学が多く、実技が少ない——そんな現状を目にして考えたのが

「UNDOKAI」の開催でした。競技としてがんばる、レクリエーション的に楽しむ、身体表現をするなどの要素があり、みんなで参加することができます。さらにチームで力を合わせる協調性、ゴールへの達成感、ほかの人への応援など、児童たちにとっていろいろな学びが詰まっています。



2019年、セネガル。低学年の児童たちは玉入れを楽しみました。2017年にセネガルで始まった「UNDOKAI」を、今はセネガル人教員が中心となって運営しています。



2018年、マラウイ。大縄跳びに挑戦し、事前練習では跳べなかった72回を達成して1位になり大喜びした児童たち。



女子が主役!

Ladies First

# 女性の社会的地位向上を目指して 初の女子陸上競技会



タンザニア

女性の地位向上に向けたサイドイベントも開催。



選抜された女子選手は10代後半が中心。世界に羽ばたくチャンスを得て、真剣に競技に打ち込んでいます。

女性の社会進出が進む都市部と比べ、地方では女性への暴力や若年妊娠が問題となっているタンザニア。スポーツは男性がするもの、男女のスポーツ能力が同じであれば優先されるのは男性——という風潮に問題意識を持っていたイカンガーさんは、JICAとともにジェンダー平等・女性のエンパワーメント(能

力開花)の実現などを目的とした女性のための競技会を、2017年から毎年開催しています。「目指せ、オリンピック」を合言葉に全国から100人以上の選抜選手が集まり、選手や引率者からは「記録が残るのがうれしい」「女子に目を向けてもらえるいい機会」と喜びの声が上がっています。

「タンザニアにも“原石”が眠っていると確信しています。練習する機会も競技会に出る機会も男子選手に比べ極端に少ない女子選手に、これからも光を当てていきます」タンザニアのマラソン界の英雄。1984、86年の東京国際マラソン優勝。

タンザニアの女子選手たちを視察して、女性自身がこれまでの環境に負けず、自分たちで道を切り開こうとする力強さを感じました。女性が活躍する社会の実現のために、ひとりでも多くロールモデルが増え、周囲からの理解や協力が広がることを期待します。

ジュマ・イカンガーさん  
JICAタンザニア事務所広報大使  
元マラソン選手

高橋尚子さん  
JICAオフィシャルサポーター  
シドニー五輪女子マラソン  
金メダリスト



2018年、19年にモスタル市の小学校低学年を対象に「UNDOKAI」を開催。約550名の小学生と教員が参加し、スポーツを楽しみました。

ボスニア・ヘルツェゴビナにはボシュニャク(ムスリム)、クロアチア系、セルビア系の3民族が暮らしています。そんな同国で民族どうしをつなげ、教育の分断を防ぐために、保健体育の共通コア・カリキュラム(CCC)作りが行われました。体育の授業を通じて、技能の習得だけでなく社会性や自発性、寛容性、栄養・衛生習慣に関する知識を身につけられるような学習指導要領です。モスタル市で試験的に導入し、体育授業の改善を支援するとともに、異なる民族の

青少年がスポーツやワークショップを通して新たな友情を築き、交流を深められるようサポートしています。



共通コア・カリキュラムに基づき実施されている小学校の体育授業。JICAが供与した機材が活用され、児童たちが楽しく体を動かします。

## ボスニア・ヘルツェゴビナ 保健体育の共通カリキュラム作り スポーツ教育を通じた 民族間の信頼醸成



ジェラン・シュタさん  
モスタル市スポーツ協会  
シニアスポーツ マネージャー

「クロアチア系とボシュニャクが住む二重行政下のモスタル市で、両民族のスポーツ交流やスルブスカ共和国の人たちとイベントを開催しています。CCCの運用には教育現場の理解が欠かせません。指導の新しいアイデアやトレンドを紹介する教員研修を行いサポートしていくつもりです」

# 協力隊員が世界へ羽ばたくサポートを 東京パラリンピック 出場決定!

2017年に体育隊員としてザンビアへ赴任し、中学校で体育指導を行っています。モニカたち障害のあるアスリートが、努力や創意工夫で限界に挑む姿に勇気づけられることが何度もあります。パラリンピックの開催によって、多くの人に私と同じような気持ちを持ってもらいたいです。

野崎さんのアドバイスによりランニングの技術が向上し、大会でのタイムが縮まりました。日本のトレーニングを知る指導者が来てくれたことを光栄に思います。自分が活躍することで、少しでも多くのアルビノの人を勇気づけたいです

野崎雅貴さん  
青年海外協力隊

モニカ・ムンガさん  
(18歳)  
陸上400メートル走  
[T12]出場予定



メダル獲得を目指します。  
野崎さんの母国での開催で、  
思いもひとしお!

モニカ選手は12歳のころ陸上競技を始めました。アルビノ(白皮症)を患い、同患者に多く伴うとされる視覚障害があります。困難が少ない生活ですが、陸上競技を続けることが心の支えになっています。「陸上競技と出会ったことで、これまでの差別を受けてきた日々から希望を見出し、自分に自信を持つことができました」。協力隊員の野崎雅貴さんは、大学のサッカー部時代に学んだ

フィジカルトレーニングのやり方をワークショップでモニカさんやコーチたちに伝え、非常に喜ばれたといいます。選手への指導は現地コーチが行うため「自分はあくまで指導補助」としながらも、器具を使わなくても行える腕立て伏せや体幹トレーニングを選手たちに紹介するなど、彼らをサポートしています。モニカ選手の東京2020パラリンピックでの活躍に期待しましょう!

国際大会出場により  
競技力が  
向上しています



インドネシアのナショナルチーム選手を講道館指導者が指導する様子。



ペルーで柔道の指導を行う協力隊員の岩永恵門さん(左)。

インドネシア ペルー  
選手の挑戦を応援

## 障害者柔道の発展を後押し

2019年3月、JICAはインドネシアとペルーの視覚障害者柔道選手とパラリンピック委員会関係者を日本に招きました。選手は、「東京国際視覚障害者柔道選手権大会2019」と大会後の合同合宿に参加。日本を含む世界15か国からの参加者とたがいに技を競い、磨き

合いました。ペルーからは青年海外協力隊員が指導した“教え子”が、今回参加しました。また、JICAはインドネシアのナショナルチームに柔道指導者も派遣。両国では視覚障害者柔道選手の競技力が向上し、視覚障害者スポーツの普及が進んでいます。



インドネシアのラフリ・アッナム・シドキ選手(奥から3人目)が「東京国際視覚障害者柔道選手権大会2019」男子66キログ級で3位に入賞しました。

# 東京2020に向けて ホストタウンのマッチングを応援!

東京2020オリンピック・パラリンピックまで1年を切りました。参加する国・地域と地方自治体が交流を行い、関係を深めていく「ホストタウン」の取り組みが進んでいます。JICAは東京2020に向けて、青年海外協力隊や連携するNGOなどを通じて、ホストタウン未登録国・地域の途上国と日本との懸け橋としてマッチングを進めています。



## マダガスカル × 郡上市 (岐阜県)

マダガスカルで女子7人制ラグビー代表の技術指導をする青年海外協力隊の中野祐貴さんが、今は郡上市の市職員となっている大学時代のコーチに合宿地として使わせてもらえないかと打診したことが、ホストタウン登録のきっかけとなりました。JICA海外協力隊員を受け入れてくれた国が、今度は日本で受け入れられる——そのきっかけづくりを隊員が担えたのは、相手国の人々とともに暮らして信頼を築いてきたからです。

右：郡上市で開催された国際試合に参加したマダガスカル女子7人制ラグビー代表チームの選手とバス回しを楽しむ畠山さん(中央)。チームを取材した畠山さんは、オリンピック出場に向けて努力を重ねる選手たちにエールを送りました。



### 女子7人制ラグビー

中野祐貴さん  
青年海外協力隊

ラグビーは、本当に人間力が試されるスポーツです。人もチームも組織も完璧なんてありません。必ず大なり小なり課題を持っていて、その課題をどう解決していくのか。彼女たちは海外に出たいというモチベーションはあるから、そこで活躍したらもっとすごいことになると思います。オリンピックに出てどこかと戦えば、世界は応援してくれます。彼女たちは、マダガスカルを変える可能性を持っていると思います。

畠山健介さん  
元ラグビー日本代表



### パラ水泳

2011年の震災前からラオスでの学校建設を支援してきた飯館村は、東京2020に向けた働きかけも行ってきました。ラオスで長年JICA草の根パートナー型事業を行うNGOのアジアの障害者活動を支援する会(ADDP)がホストタウンマッチングの取り組みを支援し、飯館村ではパラ水泳の選手をサポートすることが決まっています。パラ選手の活躍や彼らの練習に向けた努力、笑顔から、飯館村の子もたちが多くのことを学び取り、今後の共生社会構築の足掛かりになると合宿ホストを村の人たちは楽しみにしているそうです。

ラオス、パラ水泳チーム。手前のボラチット・ラタサイさん(下肢障害)は、選手会長であり知的障害者支援のジョブコーチとしても活躍。その後ろ右端のオーラン・ノッカムさんは、2019パラ水泳世界選手権に出場。

## ラオス × 飯館村 (福島県)

## 南スーダン × 前橋市 (群馬県)



南スーダンでは2016年から年1回、全国スポーツ大会が開催されています。選手や観客はみな平和実現への願いを胸に参加しています。

東京2020のキャンプ地誘致の取り組みを積極的に行ってきた前橋市が、JICAの南スーダンにおけるスポーツを通じた平和構築の取り組みに共感。前橋市からの東京2020を通じた貢献の提案を受けて、JICAはその側面支援を行っています。部族間の争いが絶えない南スーダンでスポーツを通じて国民の結束を目指してきたJICAは、前橋市のホストタウンとしての取り組みを支援することで、東京2020に向けて南スーダンの平和をさらに後押ししたいと考えています。前橋市は、選手たちとの交流を通じて市民が平和を感じる機会として、また1964年の東京オリンピックが日本の戦後復興の希望を生んだそのお返しとして、ホストタウンの役割を果たして行きたいと抱負を語っています。

